

方剂名	効能	生薬組成
書籍	主治および証	病機 方意
癰瘍剤 外瘍剤 (陽証) 7		
ごぼうげきとう 牛蒡解肌湯	疏風清熱・涼血消腫	忍冬藤・黄耆各 150 g ・当帰 36 g ・炙甘草 240 g 細末にし、1回 6 g を酒で煎じて服用する。
瘍科心得集	<p><主治> 頭面風熱、頸項丹毒、風熱牙痛。 頭面、頸項、齒齦などの局所に腫脹、疼痛、発赤、熱感が生じ、悪風寒、発熱、微汗、脈が浮数などを呈する。</p> <p><病機> 肝火偏在で津陰内傷や熱痰のあるものが風熱を感受し、熱邪が痰と結び付いて経絡に蘊結して瘍癰を生じた状態である。 風熱の邪は人体上部や肌表を犯すし、肝火、痰熱と結びついて蘊熱化毒するので、頭面、頸部、齒齦などに瘍癰が生じる。風熱表証を伴うために、悪風寒、発熱、微汗、脈が浮数などがみられる。</p> <p><方意> 疏風清熱と清肝瀉火、涼血消腫を併用し、滋陰を補佐とする。 頭面の風熱を辛散する牛蒡子が主薬で、疏風の薄荷・荊芥が補助する。清熱解毒、消腫の連翹、清肝火の牡丹皮・山梔子・夏枯草、滋陰の玄参・石斛を配合し、清熱解毒、滋陰の効果をあげる。牡丹皮・玄参は涼血散結に、夏枯草は祛軟軟堅にも働く。</p> <p><参考> 原著の主治は「頭面風熱痰毒」であるが、風熱表証を呈する癰腫に広く用いてもよい。 肝火偏旺、津陰内傷がみられない場合には、夏枯草・玄参・石斛は不要である。</p>	